

受験 番号	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
----------	----------------------	----------------------	----------------------

氏名	<input style="width: 100%;" type="text"/>
----	---

次の【詩】I・IIと【文章】を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問十七(3)以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問十七(3)の答えは国語一六の解答らんに「書きなさい」の。字数の指定がある問題は、句読点や記号も一字で数えます。

【詩】(草野心平)げんげと蛙(より)

I 春のうた

かえるは冬のあいだは土の中において春になると地上に出てきます。  
そのはじめての日のうた。

1 ほっくへくな。

みずは つるつる。  
かぜは そよそよ。  
ケルン クック。  
ああいにおいだ。

ケルン クック。  
ほっくぬのぶくりがさかっている。  
ほっくおびきなくもがつかうてくる。

ケルン クック。  
ケルン クック。

II カジカ

ききききききききき  
ききききききききききききき  
ききききききききききききき  
ききききききききききききき

そのさかい目に夜がはさまり。またひらく。  
魚のえらの明滅うきうきのよう。

【文章】(青山美智子)お探し物は図書館まで(より)

「わたし」権野正雄ごんのまさはるは四十二年間宮宮という菓子会社で働き、六十五歳の今退職したばかりである。妻依子よしことトマンシヨンの二人で暮らしており、娘千恵ちえは二十七歳で明森書店の契約社員として働いている。

結局、依子とふたりで外食をすませて帰宅し、わたしはまた洋間で『げんげと蛙』を開いた。

カジカが蛙だとわかると、じつに趣おもむきがあった。

2 そっか、蛙が鳴いているのか。

「ケルン クック」というような、春の喜びに満ちあふれた鳴き声ではないところが奥深い。  
「さかい目」も「えらの明滅」もやっぱりよくわからないが、夜の暗がりの中、水のしたたるような光景がなんとなく広がってくる。何かが……世界が、ぱくぱくと開閉しながら光っている感じだ。そこに奇妙きみょうでせつなく、それでいてどこか気の抜けるような、蛙の鳴き声が響ひびいている……。

……おお。  
これが「詩の鑑賞」というものだろうか。楽しい。わたしにもいくぶん、そっち方面の才能があるのかもしれない。

そこからゆっくりとページをめくりながら読み進め、わたしはある作品に目を留めた。

『窓』というタイトルだ。この詩集の中では珍めづしく長めの作品だった。

波はよせ。  
波はかえし。  
波は古びた石垣をなめ。  
陽の照らないこの入江に。  
波はよせ。  
波はかえし。  
下駄や藁屑わらくずや。  
油のすじ。

(中略)

数日後、段ボール箱いっぱい甘夏あまなつが届いた。愛媛えひめで農園を営んでいる依子の親戚しんせきからだ。

「うわー、すごい。これ、海老川えびがわさんにもおすす分けしましょうよ。ちょうどよかった。ブレイキのこと教えてくれたお礼」

依子は形のよさそうな甘夏をいくつか選り分け、ビニール袋びんいりふくろに入れた。

「はい。持って行って」  
「え」

「自転車、正雄さんも乗るでしょ」  
「まあ、それはそっだが」



てことは言って回ってくれないからな」

「注」職務質問されたことが思い出されて、わたしはぶんぶんと首をタテに振る。

しかし海老川さんは穏やかに続けた。

「でも警察はちゃんとやるべき仕事をしてただけですからね。知り合いに連絡しなかった私が悪い」

わたしは振っていた首を止める。そうだ。あの若い警察官も、やるべき仕事をしていただけだ。子どもたちを守るために。立派じゃないか。

「今は、**ゴカイ**がとけたんですか」

わたしは訊ねると、海老川さんはふっと優しい笑みを浮かべた。

「ええ。不動産の仕事してる常連客のひとりだが、この管理会社とつながっててね。偶然顔を合わせる機会があって。昔、店によく来てた当時の高校生が今、アンティークショップを開く準備してるって聞きました。あのころはまだ十代だったのに、もう三十半ばだって。私はダメだったけど、誰かの人生に店を開くきっかけを与えられたなら、まあ、よかったかな」

わたしは海老川さんの横顔を見た。刻まれた皺。乾いた皮膚。

彼はどこか達観していて、依子の言うように、**7** まるで仙人みだだった。

海老川さんは、いろんな職を、そしていろんな出来事を経験しながら、誰かの人生を明るく変えるような偉業を成し遂げたのだ。きっとその高校生生だけじゃなく、たくさんの人に光をもたらしたに違いない。

**8** わたしはうつむいた。

「……すごいな。わたしは今まで、ずっと同じ職場で任じられた仕事をこなしていただけです。海老川さんのように、生きざまが誰かに影響を与えるようなことは、なにも。会社を辞めたとたん、社会から無用の存在になつてしまった」

すると海老川さんは、やわらかく笑った。

「社会って、なんでしようね。権野さんにとって、会社が社会ですか」

胸に何か刺さったようで、わたしは**シンゾウ**のあたりを手で押さええた。海老川さんは顎の先を少し窓に向ける。

「何かに属するって曖昧なもんです。同じ場所にいっても、こんなふうに透明な板を挟んだだけでその向こうのことは自分とは関係ないような気持ちになりますよね。この仕切りを外せば、とたんに当事者になるのに。見るのも見られるのも、同じことなのね」

海老川さんは、わたしの顔をじっと見た。

「私はね、権野さん。人と人が関わるのならそれはすべて社会だと思っんです。接点を持つことによって起こる何かが、過去でも未来でも」

接点を持つことによって起こる何かが、過去でも未来でも……。

仙人の言葉はなんだか高度で、わたしにはうまく呑み込めなかった。

でも海老川さんの言うように、わたしにとって社会は会社だったのかも知れない。そして、それはもう、窓の外だと思っていた。ガラス越しにぼんやりと眺めるしかない、見えるのに触れられない世界。

たとえばこのマンションで普段、窓のあちら側を歩いているわたしは、今、こちら側で海老川さんと話をしている。

海老川さんの言葉どおりに考えるなら、彼と接点を持っている今のわたしにとってこの場所も……社会なのか？

波はよせ。波はかえし。波は古びた石垣をなめ――。

社会に荒波はつきものだ。

草野心平は、どこの窓から海を見つめていたのだろう。

なぜ浜辺ではなく窓からだっただろう。

それは海の美しさも恐ろしさも知っていたからではないか。だからあえてガラスを隔て、その世界を他者として傍観してみたかったのではないか。

もちろん、こんなことは単なるわたしの想像だ。

だけどわたしは少しだけ、ほんの少しだけ……。彼といっしょに、生きた気がした。

翌日の昼、わたしはひとりで駅ビルの明森書店に行った。依子には言わずに来たが、甘夏をふたつ持ってきたので今ごろはれているかもしれない。

千恵は文庫コーナーで本の乱れをなおしているところだった。声をかけると、「最近よく来るね！」と笑った。

平積みされた文庫の山に、明るいピンク色のPOPが立っている。葉のイラストが描かれ、『ピンクのプラタナス』という文字が立体的にデザインされていた。

「これも、千恵が作ったのか」

「うん。彼方みづえ先生のピン普拉。映画公開、発表されたから」

文庫の帯に、人気女優ふたりの顔写真が載っている。彼女たちが主演するのだろう。千恵はうっとりと言った。

「ホントにいいのよねえ、この小説。何気ない会話にぐっとくるのよ。女性読者だけじゃなくて、お父さんぐらいのおじさんが感動して泣いたって言うの。雑誌連載で終わらないでちゃんと本になると、内容は同じでも手に取る読者層が広がるんだよね、素敵なことだよね」

へえ、とわたしは興奮気味な千恵を見る。千恵は言った。

「本買いに来たの？」

「いや……。ちよつと、おまえに聞きたいことがあってな」

千恵は目をくると動かし、小声になった。

「もうちよつとで休憩だから待ってて。お昼ごはん食べようよ」

昼休憩は、四十五分間だという。エプロンを外した千恵と、ふたりで、駅ビルのレストランフロアに行った。蕎麦屋に入り、テーブル席で向かい合う。

温かいほうじ茶を一口飲み、千恵はふうと息をついた。

「忙しいのか」

「今日はそれほど」

湯呑を持って指の爪が、短く切りそろえられていた。大学のころは、長い爪になにやいろいろな色を塗っていた気がする。千恵は弱く笑った。

「正社員登用の話があったんだけどね、やっぱりだめだった」

千恵は今年で勤めて五年になるはずだが、契約社員から正社員になるのは難しいと聞いていた。書店業界はなかなか厳しいらしい。

「……そうか。残念だったな」

「ううん、働けるだけありがたい」

蕎麦が運ばれてきた。千恵は天ぷら蕎麦、わたしはきつねうどんだ。

「書店減ってるっていうもんな。今、本って売れないから」

揚げを汁に浸しながらわたしが言つと、千恵はむつと『a』を曇らせた。「やめて。みんながわかったような口ぶりですう言うから、そんな流れになっちゃうんだよ。本を必要としている人はいつもいるの。誰かにとって大切な一冊になる本との出合いが、本屋にはあるんだよ。私は絶対、この世から本屋を絶やさせたりしない」

千恵はずっと蕎麦をすすった。

正社員になれないとばかりながら、そんな社大なることを考えているのか。

**B** 心が動くって、そういうことなのかもしれない。本当に好きなんだな、本が。そして、本屋の仕事が。

「……ごめん。千恵がなはってるのにな。父さんよりずっと立派だ」  
わたしが箸を止めると、千恵はかぶりを振る。  
「ひとつの会社で最後までずっと勤め続けたお父さんだつて、すごいよ。がんばったよ。呉宮堂のハニードーム、みんな大好きだし」

「いや、父さんが作った菓子じゃないから」

〔注3〕小町さんともそんな会話をしたなと思いつながら、わたしはまた箸を動かす。千恵はぎゅつと《 b 》。

「えー？ それを言うなら、私が書いた本なんて一冊も売ってないよ。でも、私これがいい！ って思った本が売れたら、めちゃくちゃ嬉しい。だからPOにも気合が入るの。自分が推す本って、気持ち的にはちよつとだけ、私の本つてぐらいい思ってるよ」

千恵は天ぷらにかぶりつく。

「作る人がいるだけじゃ、だめなのよ。伝えて、手渡す人がいなきゃ。一冊の本が出来上がるころから読者の元に行くまでの間に、いったいどれだけ多くの人が関わってると思う？ 私もその流れの一部なんだつて、そこには誇りを持つてる」

わたしは千恵を見た。こんなふうには、ちゃんと向き合ってる仕事の話をしてきたことなんかなかった。いつのまにこんな……大人になって。

わたしが作ったんじゃないハニードーム。でもわたしも千恵のように、すばらしい菓子だと熱意を持って勧めてきた。誰かがおいしいと顔をほころばせる瞬間にたどりつくまで、その流れの一部になれていたことがたしかにあったかもしれない。10 そう思うと、わたしの四十二年間も報われる気がした。

「あ、そつだ。そついえばさ」

蕎麦をあらかた食へ終えたところで、千恵はトートバッグに手をかけた。中から本を取り出す。『げんげと蛙』だ。

「お父さんが草野心平を読んでいるなんて聞いて嬉しくなって、買ったやつ」

千恵は本を開き、はらはらとめくった。

「この『窓』って詩がいいよね。この詩集の中で、ちよつと異質な感じがする」  
親子で同じ詩に心を留めたことが嬉しくて、わたしは訊ねる。

「これ、なんで『窓』ってタイトルなのか、不思議にならなかったか」

ページに目を落としたまま千恵は、うーんと唸った。

「私の想像だけど。民宿に泊まってさ、窓を開けたら海！ ってなって、感動したんじゃない？ それまで部屋の中しか見てなかったのが、外にこんな世界が広がってるって知って。窓辺でシオカゼに吹かれながら、雄大な海に人生を重ねてたのよ」

最後のほうはイメージの世界に11身をへくようにして、本を開いたまま胸に押しあてる。驚いた。同じ文章なのに、わたしとはまるで違う風景を千恵は見ているのだ。

千恵といつしよに生きる草野心平はずいぶんと明るくて〔注4〕ポジティブだ。詩っていいな。わたしは心から、そう思った。

実際のところは草野心平にしかわからない。でも12読んだ人それぞれの解釈があつて、それがいい。千恵は本を閉じ、表紙の蛙をそつとなでた。

「私にとっては、自分が読者として本を買うことも流れの一部なんだよね。出版界を回しているのって、本に携わる仕事をしている人だけじゃなくて、なんといつてもいちはんは読者だもん。作る人と売る人と読む人、本つて全員のものでしょ。社会ってこういうことだなあつて思うんだ」

——社会。

千恵の口から出たその言葉に、はつとした。

世界を回しているのは……仕事をしている人だけじゃなくて……。

千恵は本をバッグにしまう。そのとき、バッグにあのカニがくっついているのが見えた。わたしが思わず「それ」と指さすと、千恵は13あどけない表情を見せた。

「あつ、これ。かわいいから、裏に安全ピンつけてバッグにしたの。いいでしょ」

よかった。このカニも、わたしの手元にあるよりもずっと楽しく生きられて本望だろう。

千恵はカニを見ながらほほえむ。

「……小学校のときさ、親子カニ競走つてやったじゃない？」

「カニ競走？」

わたしがきよんと聞き返すと、千恵は笑った。

「覚えてない？ 三年生のときよ。運動会の親子競技。背中合わせになって、カニ歩きで競走するやつ。結果はビリだったけど」

「そ、そつだったな」

「お父さん、あのとき言ったんだよ。カニ歩きするとおもしろいな、景色が横を通り過ぎていくの、いつもより広い世界が見えるなって。横歩きつて

〔注5〕「ワイドビューになるでしょ」

ぼんやりと、そんなこと言ったかなと思う。でもきつと、千恵の記憶が正しいのだろう。千恵はちよつと照れ臭そうにうつむいた。

「私、大人になってから、お父さんのあの言葉を時々思い出すんだよね。前はつかり見ると、視野が狭くなるの。だから、行きつまって悩んだときにふつと、見方を広く変えてみよう、肩の力を抜いてカニ歩きしてみようつて思うの」

そんなふうには、思っていてくれたのか。

わたしは胸がいっぱいになって、泣きたいのを必死でこらえた。

長い間、ずつと気がかりだったんだ。

おまえが大きくなるまで、仕事ばかりで依子に育児を任せきりだった。

一緒に過ごす想い出が少なかったかもしれない。わたしは娘に、何も教えてやれなかったかもしれない。

——人と人が関わるのならそれはすべて社会だと思っんです。接点を持つことよつて起こる何かが、過去でも未来でも。

海老川さんの言っていたことがようやく理解できた気がする。

会社だけじゃない。親子の間にもちゃんと「社会」があつたのではないか。

14幼いころにわたしが何気なく口にした言葉を、大切に解釈して自分のものにしてくれた千恵。成長したその姿に大きく心を揺さぶられるわたし。

千恵のバッグで、動き出さんばかりのカニが私を見ている。

わたしはこれまでずつと、前へ前へと歩いてきた。人生はタテに伸びているものだと思つていた。

でも今、横歩きの景色には何が見えるだろう。

そばにいてくれる娘が、妻が、日々の生活が、どんなふう映るだろう。

千恵が店員に向かって片手を挙げ、ほうじ茶のお代わりを頼む。そして思い出したようにわたしを見た。

「そついえは、聞きたいことつて何？」

〔注〕

- 1 職務質問 警察官があやしい者に道ばたで行う質問。
- 2 POP 書店員が本の宣伝のために書いたカード。
- 3 小町さん 『げんげと蛙』を貸し出してくれた図書館の司書で、カニのマスコットを本と共にくれた。そのカニは千恵の手に渡つた。
- 4 ポジティブ 〓ものごとに対して前向きであるようす。
- 5 ワイドビューになる 〓視野が広がる。

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 ほつへ くなとありますが、へ くに入れるのにもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア けだるい    イ せつない    ウ ねむたい    エ まぶしい

問三 2 そうか、蛙が鳴いているのかとありますが、

(1) これは【詩】の中のどの部分を読んでこのように言っているのですか。【詩】の中からぬき出し、はじめとおわりの三字を書きなさい。

(2) (1)を「わたし」はどのようなものだと感じていますか。【文章】の中からぬき出し、解答らんに合わせてはじめとおわりの三字を書きなさい。

問四 3 依子はそうは言わないが、そう思っているように感じるのとありますが、この時の「わたし」の気持ちとしてもっともよくあてはまるものを次のア～

エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 海老川さんに自転車のブレーキを直してもらったことになった責任を依子に追及ついせきされているように感じている。

イ ほとんど話したこともない管理人なのに甘夏をおすそわけしようとする依子の熱心さに気おくれしている。

ウ 詩を読んだり自転車に乗ったりなどの新しい楽しみを見つけたのに依子に否定されたようで気分が沈しずんでいる。

エ 定年退職して時間をもてあましていることに対する後ろめたさを依子に言い当てられたように感じている。

問五 4 その場しのぎの言葉とありますが、これと同じ意味になるように【文章】の中からぬき出し、解答らんに合わせて書きなさい。

問六 5 へ くてたためでもなかったとありますが、へ くに入る語としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答え

なさい。

ア あたかも    イ あながち    ウ ことごとく    エ すこぶる

問七 6 その風景を見ていたら、『窓』の詩が思い出されたとありますが、なぜ思い出されたのですか。【文章】の中の言葉を使って説明しなさい。

問八 7 まるで仙人みたいだったとありますが、どのようなところが「仙人みたい」のですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選

び、記号で答えなさい。

ア 長年行き交う人々を眺めることで、人間のあるべき姿を理解しているところ。

イ 職を転々とし借金を抱えるなどの苦勞でしたが、それを気にかけないところ。

ウ 皺が刻まれて皮膚が乾いているなど、長い間生きてきたことがわかるところ。

エ 優しい笑みを浮かべ穏やかに接することで、人を安心させる力があるところ。

問九 8 わたしはうつむいたとありますが、この時の「わたし」の気持ちとしてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」は職務質問されたことを怒っていたが、警察官はやるべき仕事をしていただけで立派だったと気づき反省する気持ち。

イ 「わたし」は今まで一つの仕事をしてきたことに誇りまほを持っていたが、いろいろな経験をしておけばよかったと悔やむ気持ち。

ウ 「わたし」は多くの仕事をするこなく過すぎしてきた自分には能力がないのだと感じ、自信をなくしてがっかりする気持ち。

エ 「わたし」は仕事を通じて誰かに影響を与えることもなく、退職した今は社会から無用の存在になったと感じ落ちこむ気持ち。

問十 9 それはもう、窓の外だと思っていたとありますが、これはどういうことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 職を渡り歩き最近まで警察に搜索されていたという海老川さんの話は予想外のもので、一つの仕事しかしてこなかった「わたし」には共感できないと思っていたこと。

イ 誰かの人生を明るく変えるような偉業を成し遂げた仙人の言葉は「わたし」にとっては難しすぎて、会社で普通に働いていた自分は理解できないと思っていたこと。

ウ ずっと同じ職場で任じられてきた仕事をこなしてきた「わたし」にとって社会は会社のことであり、退職した今の自分は社会と関係を持つことができないと思っていたこと。

エ 平凡な人生を送ってきた「わたし」は寄せては返す社会の荒波に立ち向かうことはできないと思い、世界は透明な板を挟んだようで直接触れられないと思っていたこと。

